

# カリフォルニアを視察して

町内の農業後継者6名が、9月29日から4泊6日の日程で、カリフォルニア州の近代農業視察を行いました。これは町が、現在の農業情勢の厳しい中、若手営農者に国際感覚を持つ優れた地域農業のリーダーになってもらおうと行なったものです。ここに、視察に参加したみなさんの体験記をご紹介します。

成田空港を発ったのが9月29日の午後5時40分。夜を飛び越えて6時間後には朝焼けを見る。

電子産業の集積地として有名なシリコンバレーの中心地、サンノゼ空港に降り立つ。時差16時間に加え、現地での行程は厳しいものがあつたが、貴重な税金より補助をいただいている緊張感と、物珍しさのためか昼寝も出来ず超寝不足状態での視察研修となつてしまった。

上空から見たカリフォルニアの第一印象は、灰茶色の丘が広がる不毛の台地。草木が枯れ上がり、「このような景観を呈している場所、本当に米や野菜が育つのだろうか？」とまず疑問を持ったが、温帯冬雨気候で冬には緑がよみがえるとのことだった。

到着日当日は、サンフランシスコの市内見学などをしたが、舗道に紙屑が舞い、物乞いがいたるところで紙コップを差し出しているなど、近代的なビル群

が建ち並ぶ中での対照的な光景に、多民族国家であり、景気上昇中ながらも雇用が増えず失業者が多いというこの国の問題の深さを垣間みたようだった。

翌朝はバスで北西部のスクラメントバレーに向う。途中スーパーの食品売場では、野菜の量り売りなどがあり、ズッキーニ、アーティチョークなど珍しい野菜を発見。精米売り場では、9K袋入り、6ドル〜13ドル位で売られていた。

やがて広々とした農地が広がり、ぶどう、牧草、ビート、トウモロコシ、アーモンドなどが見える。ちなみに、カリフォルニアの面積は日本の1.1倍、日本とは逆に海岸山脈とシエラネバダ山脈に挟まれた地形で、中央が広大な平原で、全米一の農業生産の地となっている。米については、南部諸州が長粒種であるのに対し、カリフォルニア州では中粒種が適し、その収量は玄米ベースで10アール換算600キ

ロ〜800キロ(M401種)と高く、その栽培概要は日本の4倍量の程の種籾を、レーザー付きブルにより均平化された田に、飛行機で湛水直播、除草剤を2〜3回、元肥はチソソで15キロ程、耕地は、加里は豊富だが鉄・亜鉛が不足しているとのこと。各農家では、収穫して精米所に売り渡すまでが仕事で、その大部分を農業サービス会社へ委託している。

以上は予備知識として、田枚農場を見学。田枚氏(44才)は福島県出身で、7年前この地に入植し、現在はコシヒカリ85haを作付けする稲作農家。コシヒカリ、秋田小町はカリフォルニア

ア州ですでに3000ha程作付けされているという。田枚さんは、昨年まで2割強の減反をしていたが「新農業法」による補助金カットのため今年は全面積を作付けしたとのこと。田枚さんの農場購入価格は1エーカー(4反歩)2千ドル〜3千ドルで14万ドルを投じた精米所を持ち「田枚米」のブランドで販売

までの一環経営を目指したが、昨年ブランドと共に売却したこと。初期投資過剰であったのか、共同出資者の方針転換であるのかは知る事はできなかったが「今後の規模拡大の方針は？」との質問に、はつきり「ない」と答えられた。帰途の際、車窓から大型の精米施設が何箇所か見えた。かつて地元の新報に「日本人投資家T氏が、他の5人の投資家と共にワイリアムズに200エーカーの土地を求め、さらに精米所建設を計画中である」との記事は精米業者や、農業関係者に重大な関心を与えたという。「将来、日本市場が開放された時、輸出の拠点として先を越されるのでは？」との懸念だったらしい。7年前の日本はバブル絶頂期で米国不動産への投機最盛期。はたしてコメへの参入もその流れであったのか？

二日目は、サンフランシスコから200キロ程南下したサリナス

の野菜産地を視察。全米の野菜生産の6割を担うというカリフォルニア州の中でも、レタス、ブロッコリー、いちご、セロリーなど総面積8万6千haに農家700戸。1戸当りの耕作面積600〜800haとカリフォルニア州平均の145haからみても突出しており、農家というより企業体の集団で「世界のサラダバスケット」と呼ばれているという。経営者の指示のもと、輪作体系をとる多くの野菜は、それぞれの機械作業を高度な技術を持つ農業サービス会社に委託し、間引きや収穫は、主にメキシコ人労働者の人海戦術で行われ、チーム毎に競争原理の働く「出来高払い」となっている。賃金は平均すると時給7ドルぐらゐとのこと。なお、この地の農地地価は、1エーカー6千ドル〜1万2千ドル(反当り16〜33万円)。反当り



ハーベスターによる稲の刈り取り



コシヒカリの収穫を前に視察団に説明する田枚さん(右端)